

日本宗教から 一神教への提言

国際日本文化研究センター
名誉教授

山折 哲雄



遠藤周作『沈黙』が語る、慈愛の神

昨年12月、パリのユネスコ本部で、ある宗教対話に関する国際会議が開かれました。私は、日本の宗教のことを紹介してほしいというお招きを受けて参りました。この国際会議のテーマは「宗教対話、文化の多様性」で、主催はバチカンです。なぜ日本の宗教かといえますと、「日本はアジアの中で西洋と東洋の二つの世界に開かれた国である」と。なかなかいいことを言ってくれますね。その会議で私は二つのことを定義しました。一つは、遠藤周作というカトリック作家のキリスト教の問題。二つ目は、宗教対話と宗教的共存とは違うのではないかということ。今必要なのは宗教対話ではなく、宗教的共存の可能性を拓くことではないかということです。

遠藤さんの主要著作は英語やフランス語にも翻訳されていますので、何人かのパネリストもお読みになっていました。私はそれを前提にしたわけですが、まず取り上げたのは遠藤さんの話題作、名著ともいわれている『沈黙』という作品です。16世紀、ポルトガルの宣教師が日本にやって来て、その一人ロドリゴが逮捕され拷問を受けて、ころぶ。その時に踏み絵をさせられます。あのイエス・キリストの顔を踏みか踏むまいか悩みに悩んで、ついに踏む。その時にキリストの声か、あるいは神の声と考えるような声が天上から聞こえてきます。「自分は汝らに踏まれるためにこの世に現れた。十字架にかかって十字架に苦しみを受けた。踏みなさい」と。その声に励まされ、背中を押されるようにしてロドリゴは踏み絵を踏みます。

その場面を描いてから遠藤さんが、こういう意味のことを書いています。「あの当時の日本の信徒たちの上に存在した神は、愛の神である。仏教の慈悲の心で輝いている赦しの神である」と。これが昭和41年当時の日本のカトリック信徒、遠藤周作の、キリスト教に対する考え方の基本だったと思います。まだ神は超越的な神として、天上高く存在している。しかしその神は怒りの神でもなければ、倫理的な神でもない。母親のごとき慈愛に満ち満ちた愛の神であり、赦しの神である。

『深い河』で変貌した遠藤の「神」が示す、
日本におけるキリスト教の変容

ところがそれから30年が経ち、晩年の遠藤周作は『深い河』を書きます。東京の神学校で学んだ神学生が、日本の神はヨーロッパの神とは違うと主張して宣教師に忌避され、学校を辞めて流れ流れてインドへ行きます。ヒンドゥー教の聖地ベナレスで、行き倒れ同然で死んでいった人々の死体処理、死体運搬の仕事をする。そこへ東京の神学校時代の友だちが訪れてきて、言います。「このインドにおいては、キリスト教の神というのは、キリスト教徒の上にもヒンドゥー教徒の中にも仏教徒の心の中にも光臨なさる神である。内在する神である」。

ここまでまいりますと、ほとんどキリスト教の神ではなくなつてしまいます。遠藤周作は超越の神を、最終的に「内在する神」、いわば「多神教的な」と言っているようなヒンドゥー教の神、あるいは仏教的な神、仏と近づけた形で理解の仕方をしています。16世紀以来、日本に伝えられたキリスト教というのは、あたかも遠藤周作が『沈黙』から『深い河』にかけてし

たようなキリスト教の信仰体験を、五百年にわたって経験してきました。その一つが、たとえば隠れキリシタンとして日本に土着したキリスト教だったのではないのでしょうか。西洋世界におけるキリスト教と日本に伝えられたキリスト教とはかなり違う、場合によっては根本的に違うかもしれない。一神教的な神が多神教的な神へと変容していくプロセスを、遠藤周作の一生、作品は明らかにしているのではないのでしょうか。

20年ほど前、私は長崎県の生月（いきつき）という島に行きました。隠れキリシタン信仰が長く伝承されてきた地域です。ここでは神棚の下に仏壇があり、その下に、観音開きになった小さな格納部分がある。観音開きを開くと、中に小さなマリア観音が祀られています。人々はそのマリア観音を、納戸にしまわれていることから「納戸神」と呼んでいました。これは安産の神、子育ての神です。

そのとき生月に伝えられている「オラシヨ」というカトリックの聖歌をテープで聴かせていただいたのですが、これが何度聴いても私には御詠歌にしか聞こえない。最近専門家の間では、オラシヨの旋律を分析すると、これがきちんとグレゴリオ聖歌の旋律になっていると言われています。いや、そうではなく、グレゴリオ聖歌は完全に御詠歌化、日本宗教化してしまったのだと解釈することの方が正しいのか。その間を私は行ったり来たりしていました。どう考えても、あの歌の旋律を通してキリスト教の本質が伝えられているとは、私には思えなかったのです。しかしそれを伝えている人たちは、自分たちは隠れキリシタンだという自覚がある。キリスト教の日本化ということがどういう意味をもつかを考えた場合、この生月オラシヨの問題は、

実に遠藤周作の問題であると私は考えてきました。

宗教的対話と宗教的共存との違い

2番目は、ちょっと理屈っぽい話でした。結局こういう宗教的対話に関する学会や集まりでは、一神教対一神教、一神教対多神教との間での対話は必ずそれぞれの信仰体系、教義、特質などの主張の投げ合いになってしまいます。疲労困憊して最後に到達する結論は、「お互いに違うということを理解し合うところの意味がある」というもの。必ずしも私は否定的に言っているわけではありませんが、私はこれが宗教的対話の、ひとつの重要な傾向性であると考えました。

それに対して多神教と多神教との間の対話というのは、ほとんど為されたことはありません。そもそも必要がない。始めから多神教的な世界においては、それぞれの多神教の世界観や信仰は自然な形で共存しており、似ているからです。したがって宗教と宗教の関係を考える場合には、二つの概念の枠組みがあります。一つは、一神教対一神教、一神教対多神教という対話の仕方でも成立する宗教的対話。ところが、多神教的世界においては対話や論争の必要がなく、お互いが攻撃的態度を取る必要がない。そういう意味において共存している。宗教的対話と宗教的共存、この二つの枠組みがあることを、私はパリで主張しました。

「黒いマリア」信仰と

「ドゴール將軍墓地巡礼にみる現世利益信仰」

10年ほど前にスペインのバルセロナへ行った時、近くのモンセラート修道院という11世紀の修道院をお訪ねして数日間滞在しました。「黒いマリア」でよく知られた修道院です。中央礼拝堂では、正面に十字架にかかったイエス・キリスト像が安置され、脇から階段を上っていくと2階部分に黒いマリア像が



満員となった講演会場の風景

安置されています。ところが、毎日のように全ヨーロッパから大型バスを連ねて来る巡礼の方々は、中央祭壇のキリスト像の前で礼拝する人はほとんどいなくて、皆その階段を上り、黒いマリアの前で列をつくって拝むのです。黒いマリア像を拝む、手で触る、接吻する。マリ

ア様はテカテカに光っています。まさに現世利益の信仰のメッカです。大衆、民衆の関心を集める浅草の観音さんと変わりがいないあとと思ひながら、私は見ていました。かつて私が住んでいた洛西には「花の寺」というお寺があり、お堂の前に「おびんづるさん」が安置されています。私も人々も手を触り、頭を触る。頭のところはテカテカに光っています。黒いマリア像の前で、私はあのおびんづる信仰を思い出しました。

パリから南へ2時間ほど行ったコロンベという田舎には、救国の英雄といわれるドゴール將軍のお墓があります。彼が亡くなった後、フランス全土から巡礼がこのお墓を目がけてお参りするようになりました。その数は年間100万人といえます。私が驚いたのは、そのお墓の前に絵馬のような奉納物が山と積まれていることでした。たまたまやってきた身体の弱い親子は、そのお墓に触れ、患部をすり合わせていました。これも黒いマリア信仰、我が国におけるびんづる信仰、ご祈祷寺や供養寺における参拝者の行動とまったく同じだと、その場で知らされました。

多神教的価値観とデモクラシー

そういう世界各地の現世利益信仰、多神教的価値観に基づいた民間信仰の現状を見てまいりますと、ヨーロッパの世界は一神教世界といいますが、民間の世界においては多神教的な価値観や信仰がこれだけ多様に存在していることに驚かされます。その驚かされていく過程で私の頭の中にふっと浮かんできたのが、本来民主主義というのは多神教的な価値観に基づいて作ら

れるべき政治システムではないかということ。多神教とデモクラシーとは、非常に融和しうる関係にあるものだということです。ところが我々は、デモクラシーというのは一神教の胎内から生み出されたものだと思われてきています。ヨーロッパにおける近代市民社会は、宗教改革を経て生み出されてきました。そこでデモクラシーが、政治システムとして生み出されていくわけです。しかし、ここで疑問が生じます。デモクラシーがさまざまな価値観、多元的な世界観、そこに住んでいる人々の欲求、欲望、願望を吸い上げる政治システムであるとするならば、むしろ多神教的な世界観とデモクラシーは最も適合する関係に立つのではないかという考えが自然に出てきますね。皆さんは、どのように考えられますか。

中国の道教信仰と日本の民間信仰との共通点

私はこの数年で中国に何度もまいりましたが、大学のシンポジウムなどに参加していますと、日中関係を積極的に盛り上げていこうという観点からの問題提起や議論が行われています。北京では集会の帰り道に盧溝橋へ行くと、近くにある中国人民抗日記念館では徹底的な反日教育が入館者に対して行われています。大学のシンポジウムでは「熱烈歓迎」、抗日記念館では徹底した「反日」。本音と建前が、建前と本音なのか、我々としては思い迷うところです。私は何度かこういう場面に接して、これは二つとも本音なんだと思わざるをえませんでした。我々のものの考え方のパターンとは全く違います。私はこれをいいとか、悪いとか言っているわけではありません。それなりの歴

史的理由があり、そういう状況になっているのです。

次に中国国内の道教寺院に行きますと、状況はガラッと変わります。中国において仏教はほとんど廃れてしまいましたが、道教の寺院に対してはずつと変わることなく、国民の皆さんが朝昼晩と敬虔な信仰を捧げてお参りしています。道教というのは多神教的な世界です。これからの日中関係をマイルドな形で軌道に乗せていくために、もう少し一般の中国人がどういう信仰の中で生きているかを知れば、そして彼らの道教的価値観を大事にすれば、そこから何か日中関係改善への手がかりが生まれてくるのではないのでしょうか。

中国の指導部には、共產主義の底にどこか儒教的な倫理があるように私には感じられます。その一つが「死者を赦さない」という考え方。墓を暴き、遺体を引きずり出して屍に鞭打つ。ところが日本は何でもかんでも赦してしまふ。我々の社会は「死者を赦す」文明なんですね。ですから靖国神社に祀られているA級戦犯は、中国の文明からすると絶対に赦せない存在なのです。我々は、A級戦犯は大変な戦争犯罪者であるという認識をもつ一方で、「死ねば仏だよ」と、どこかで赦すところがある。この死者を赦す考え方の底に流れているのが仏教です。死者を浄めるという浄化システムが仏教思想には含まれており、特に日本仏教はそれが強い。その溝はなかなか埋めることができません。しかし、中国人の道教信仰と我々の民間信仰というものは、全てを結ぶことができます。共通の橋を架けるとすれば、その水路を大事にすることではないかと私は思います。

る、大戦争が起これると思っています。

エルサレムでの巡礼者の行動を見ていますと、ユダヤ教徒は「嘆きの壁」にやってきてお参りして帰り、隣のイスラムの「黄金のドーム」にはお参りしません。イスラム教徒もキリスト教徒も同じで、それぞれが往復運動をして帰っていきます。この往復運動が一神教信徒たちの行動の特徴です。私は、一神教の教徒が他の一神教の聖地を巡り歩くようになったら、これは世界融和の芽が出てくるのではないかと思っています。

我が国の巡礼行動はどうでしょうか。四国八十八所札所にしても、西国三十三観音霊場にしても、山あり谷ありの空間を巡り歩くのが我々の巡礼行動です。昔は伊勢参宮をした人がそのまま熊野詣をし、西国三十三観音霊場を回っていったものです。神々の世界と仏たちの世界は、同じく巡礼する対象にありました。その源流は、私はインドにあつたと思います。逆三角形の非常に大きな大陸を右回りに巡り歩くという大きな巡礼路がすでに紀元前の頃に出来上がっていて、この巡礼パターンが仏教伝来と同時に日本に伝わりました。アジア的多神教的巡礼行動は円運動が基本で、一神教の世界における巡礼行動は往復行動が基本になっている。このへんの折り合いがつけば、問題解決の一つの糸口になるかもしれません。単に宗教だけでなく、文化、政治の問題でもありますので、難しいことだとは思いますが。

一神教、多神教、どちらがよいということでは決してありません。絶対的な価値や優劣をつけるという考え方は自由になつていなければならないとは思いますが、本日私に与えられたテーマを考え、日本宗教は一神教に対してどんな提言ができる

（一神教信徒の取る往復運動と多神教信徒の描く円運動）

一昨年、私が勤めていた国際日本文化研究センターが、シンガポール大学と共催で国際研究集会をすることになりました。そのときシンガポール市内の宗教施設を見て回りましたが、驚いたことがあります。ダウンタウンにある大寺院の中に、世界のあらゆる宗教の施設が共存しているのです。大勢の人々が自分の宗教の寺に参り、一人で複数の宗教の寺を回る人もいます。その寺には「Mixed Religion Temples」と書いてありました。シンガポールという国家を形成しているのは、まさしく多民族・多宗教の人々ですから、その人々があの狭い地域で快適に共存していくためには、共存せざるをえないわけです。

一神教と多神教という二元論で物事を判断するのは、もうそろそろ止めようじゃないかと私も思っています。にもかかわらず、一神教的な価値観、多神教的な価値観というものは、いろんな場面に出てきて衝突や対立を起こしたり、様々な摩擦を生じさせたりしていることは間違いないと思います。そういう時に最後に戻ってくるのは、どうすればいろいろな価値観が共存できるかという問題になってきます。

そのような時に思い出すのが、1995年、イスラエルに行ったこと。私の訪問の目的の一つは、イエス・キリストが辿った道を私も辿ってみることでした。エルサレムには、中心部に3大宗教の聖地がありますね。これらが1キロ四方のところに密集し、共存し続けている。これは凄いことです。その一神教の聖地でテロが起これる時、私は世界は大変なことになる

るかと思えますと、私が申しあげたいことは二つです。

一つは宗教的対話も大事ですが、実際に存在している宗教的共存の現実をお互いにまず認めることから出発しようではないかということ。二番目は、他の信仰、宗教を大切にするためには、他の信仰、宗教を観念的に認めるだけでなく、そこに我が身を運んで共に拝み、祈ってみることが大事なのではないか。そのための行動を始めようではないかということ。私はイスラエルではナザレからバスに乗り、イエスが少年時代を送ったといわれるガリラヤ湖に行き、ヨルダン川を下って最後はエルサレムに入りました。直線コースにして約150キロ。私はお釈迦さんの歩いた道もたどったことがあります。それが約500キロでした。伝道のために歩いた距離は凄いものです。

点々と問題を出しただけでもありませんが、これが私の問題提起でございます。

（2006年3月15日、公開シンポジウム「日本宗教から一神教への提言」での講演。大学神学館礼拝堂）

山折 哲雄 氏 (やまおりてつお)

略歴

1931（昭和6）年生まれ。54年東北大学文学部卒業、59年同大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。東北大学文学部助教授、国立歴史民俗博物館教授、白鳳女子短期大学学長、国際日本文化研究センター所長などを歴任。専門は宗教学、思想史。著書に『山折哲雄対談集—日本人のこころの旅』（2006年、講談社）、『さまよえる日本宗教』（2004年、中央公論新社）、『近代日本人の美意識』（2001年、岩波書店）他多数。